

第139回貴重書展示
総持学園創立90周年記念

旅の源氏物語



平成27年1月22日(木)～2月14日(土)
鶴見大学図書館 エントランスホール
* 特別講演会とギャラリートークがございます

【日時】 2月7日(土) 14:00～15:30

【場所】 鶴見大学図書館地下1階ホール

鶴見大学図書館・源氏物語研究所
後援；紫式部学会・武蔵野書院

あけましておめでとうございます。

毎年新春の貴重書展示は、吉例により源氏物語研究所が担当します。今回は総持学園創立90周年記念事業の最後に位置する催しです。あわせて講演会も行うこととなりました（講師の苦吟が目に見えるようです）。見事掉尾を飾ることが出来ますかどうか、是非お確かめください。

さて、展示のたびごとにしつこく申し上げております通り、当研究所の最大の仕事は、『源氏物語』とそれに関連する分野について質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確で実証的な調査を行うことにあります。華やかな現代的言説や犀利を装った片仮名言葉満載の議論は、所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代われ、「流行りものは廃りもの」の平凡な哲理を納得させられることになるでしょう。

国文学といういささか古風な学問が、研究者の外側に厳然として存在する作品を相手にする以上、思弁や図式化ではどうにもならず、資料すなわち書物と向き合う素朴な方法こそ最も生産的であると言うところに結局落ち着きます。したがって、限られた予算を最大限有効に活用し、目録を眺め回し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めなくてはなりません。その結果、学界のみならず一般にもよく知られる優秀な貴重書コレクションが形成されました。

さて展示では、『源氏物語』の中からさまざまな旅を取り上げます。紫式部に限らず当時の女流作家たちは、ほとんど地方官の家柄出身であり、親や兄弟は遠近都鄙の行政に豊富な経験を持っていました。彼女ら自身、国司の配偶者となり夫の仕事を助けた人も少なくありません。御簾垂れ込めた部屋の奥に住まい、なかなか外出しない平安時代の女性、と思われがちですが、京都近郊に出かけることも、当時はちょっとした楽しみだったでしょうし、物詣で・家族の地方赴任など、結構遠出の機会は多くありました。

そんなことを考えながら、書物を選び解題を書き、『源氏物語』の多面性に改めて気付かされた次第です。

では、ごゆっくりとお楽しみください。

平成乙未青陽下浣

源氏物語研究所

高田信敬

*立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館の典籍のみでは足りない箇所個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

旅の源氏物語

* = 個人蔵

展示目録

I 洛外の名所

- 1 蒔絵筆筒入源氏物語 夕顔 江戸時代前期写 列帖装54冊
- 2 源氏物語絵巻 若紫 天保2年(1831) 幽遠齋画 卷子本3軸
- * 3 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅
- 4 源氏物語提要 卷4 行幸 江戸時代後期写 袋綴6冊
(参考) 絵入源氏物語 行幸 慶安3年(1650) 跋 承応3年(1654) 刊 袋綴60冊
- 5 十帖源氏 夢浮橋 万治4年(1661) 刊 江戸時代前期刷 袋綴10冊

II 宇治の風景

- 6 源氏物語 橘姫 帚木・夕顔・松風・浮舟欠 江戸時代前期写 列帖装50冊
(参考) 都名所図会 卷5前朱雀 林芳兵衛刊 江戸時代後期刷 袋綴6冊
- 7 花鳥余情 第25宇治巻の内 椎本 江戸時代後期写 袋綴10冊
- 8 絵入源氏物語 小型本 総角 江戸時代前期刊 袋綴30冊
- * 9 源氏五十四帖 尾形月耕画 早蕨 明治25年(1892) 横山良八刊 1枚
- 10 源氏物語 古活字版 東屋 寛永(1624~1644) 頃刊 袋綴54冊
- 11 源氏物語絵 浮舟と勾宮と鷺 室町時代後期写 軸装1幅

III 近国の旅

- * 12 源氏物語断簡 伝冷泉為相筆 関屋 河内本 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉
- 13 源氏物語 伝冷泉為相筆 須磨 鎌倉時代末期写 列帖装1冊
- 14 源氏物語 奈良絵本 明石 江戸時代前期写 列帖装1冊
- 15 源氏物語 未装幀零本 澤標 伝交野時久筆 江戸時代前期写 仮綴1冊
- 16 源氏大鏡 第3冊の内 玉鬘 江戸時代前期写 列帖装4冊

IV 鄙の往還

- 17 源氏物語 零本2冊の内 夕顔 江戸時代初期写 袋綴2冊
- 18 源氏物語 龍文刷題簽 須磨 江戸時代前期写 列帖装54冊
- 19 源氏小鏡 玉鬘 明暦3年(1657) 安田十兵衛刊 袋綴3冊
- 20 絵入源氏物語 横本 手習 万治3年(1660) 林和泉掾刊 袋綴29冊

解題

旅の源氏物語

* = 個人蔵

I 洛外の名所

山水の美に恵まれ古社寺の数多い土地柄ゆえ、『源氏物語』には京近郊の様々な名所が描き込まれています。現在ほんの僅かな時間しか要しない往来も、状況によっては冒険に類する旅でした。また近郊ならではの気楽さ・手軽さも見落とせないところです。

1 蒔絵筆筒入源氏物語 夕顔 江戸時代前期写

列帖装54冊

金泥・金箔を贅沢に使い、当該の巻にちなむ下絵を描いた縹色紙表紙（縦23.7、横16.7糎）は江戸時代前期嫁入り本の典型。押し発装あり。表紙中央に金泥下絵絹地題簽（縦14.9、横3.0糎）を押し、「桐つほ」以下の巻名を墨書するが、これは本文の書き手よりさらに能筆である。また絹地題簽を用いるのは、やや珍しい。卍繋ぎの厚手金紙見返し。上質の斐紙を用いた列帖装の揃い本であり、保存状態は極めてよい。後に言及する通り、華麗な蒔絵筆筒に収められ、貴重な調度品として保管されたからであろう。

每半葉10行20字前後の書写を定式とするが、花散里・関屋・篝火は8行。これらの巻は分量が少ないので、墨付き丁数を増やし書物としての体裁を整えるための工夫である。長い伝来過程において紺の綴じ糸が切れ、紫の絹糸で綴じ直されている。その際主として括り単位での錯簡を生じたりしく、現在、空蟬・夕顔・若紫・関屋・絵合・胡蝶にやや複雑な錯簡を見る。

全冊に朱の句読点・合点、ままたま墨のイ本校合を施す。句読点・合点を持つ持つ伝本の多くは河内本系であるが、掲出本は青表紙本系の肖柏本・三条西家本に近い。夕顔の後半は絵合の巻に錯綴されており、「ほのかなるに鳥べ野のかた見やりたるほどなど物むつかしきも」（源氏物語大成133頁）の「に鳥べ野のかた見やりたるほどなど」を見セケチとし「イ」と注記するのは、他に例のない異文。

典籍は勿論、蒔絵筆筒も重要である。蓋表・側面・背面に仙翁を主要画題とする金銀秋草蒔絵が施され、螺鈿・蒔絵等で巻名を示す。天板中央の提環や蓋上部の唐草文様鍵金具は銅鍍金であろう。この優雅な筆筒と相当程度重なる意匠の歌書筆筒が現在静嘉堂文庫美術館にあり、同一工場の作と推される。

展示箇所は、夕顔の最後の姿を確かめようと光源氏が深夜赴いた東山。しめやかに念仏の響く庵で、「いさゝかかはりたる所な」い夕顔が横たわる。右面最終行「きよみづのかたぞひかり／おほくみえ人のけはひもしげかりける」と夜でも参籠の人々が多かつた清水寺が描かれる。この後、源氏は気分が悪くなり、賀茂川堤のあたりで馬から降り、清水の観音を念じ惟光に助けられてようやく二条院へ帰る。

2 源氏物語絵巻 若紫 天保2年(1831)幽遠斎画

卷子本3軸

薄手楮紙（縦28.6、横約38糎）を継ぎ、裏打ちを施して3軸の卷子本とする。上13紙・中

20紙・下21紙。各巻に1紙1図を割り当て全54図とするが、橋姫は2図あり、椎本巻の分を欠く。継紙の状態でご館に入り、補修の上3軸に仕立てられた。題簽は貞政少登先生（本学名誉教授・前独立書人団理事長・日展参与）の御揮毫である。

上巻冒頭に古色の付いた厚手楮紙（幅約5糎）を張り継ぎ、「源氏五十四帖 探幽」と墨書、絵師幽遠齋の識語「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印／同 中／同 下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠齋写」が続く。この識語の示すところは、**4（参考）承応3年刊絵入源氏物語**の特徴と一致し、図柄も大略同じである。先に述べた橋姫2図はそのままの順序で絵入本に収められ、影響関係の推測に役立つ。

しかし冒頭厚手楮紙墨書の伝える狩野派の巨匠探幽（1602～1674）の絵入本模写は考えにくく、またその証拠もない。たしかに狩野派の画風ではあり、当たりの強い描線と軽妙な淡彩とが特色。土佐派や住吉派などの温和濃彩の大和絵とは異なる源氏物語絵巻の作例は、かなり珍しい。幽遠齋の伝記は未勘、他に1作（都立中央図書館『椿図』）のみを知り得た。なお、絵入源氏物語と重ならないこの絵巻の図については、なお考究を要する。

上巻より、「わらはやみ」加持のため北山に赴いた光源氏と、迎への君達が合奏する場面を展示した。「いとみじき花のかげに」琴を弾くのは光源氏、右側に僧都、横笛は頭中将が吹きすます。「苔のうへになみあてかはらけまゐる、おちくる水のさまなどゆゑある瀧のもとなり」と描写される若紫巻の晩春である。

＊3 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅

光源氏の野宮訪問を描いた大和絵（縦91.7、横38.8糎）。その上方に賢木巻より本文を抄出して（源氏物語大成335～336頁）散らし書きとする。絵自体は入念の作と評価しうるもので、安土桃山時代まで遡るか。しかし処々に顔料の落剥や料紙の割れも見え、それを補完すべく後代の筆が入っている。とくに光源氏と対座する六条御息所のほぼ全てが補筆らしいのは、惜しまれる。

元来複数の場面から構成される屏風もしくは障子絵であったか。上部の本文は、1場面ごとに鑑賞されるようになってから余白を生かして書き込まれたようで、料紙と馴染みが悪く、散らした金箔の上に文字が載っている箇所もある。御息所の和歌「神がきはしるし／のすぎもなき／ものを／いかにまがへて／おれるかざしぞ」の第5句「おれるかざしぞ」は、諸本「をれるさかきぞ」に作るの珍しい異文である。

晩秋9月の色づく木々を点綴し、小柴垣・黒木の鳥居が齋宮御所であることを示す。野宮の絵では、「小柴垣を大垣にて…黒木の鳥居どもさすがにかうがうしく」（大成334頁）により、小柴垣・黒木の鳥居を添えるのが源氏絵の故実。従者も光源氏も面貌を精細に描き分けており、表情豊かな人物表現であることに加え、衣紋や建築の線引きも丁寧、絵師の高い技倆が窺える。



後筆の本文5行目に「さかきをいさゝか折て」とある通り、小柴垣・黒木の鳥居の他に榊の枝を画面中に描き添えるのが伝統となっており、掲出の軸でも源氏と御息所の間、絵の具は落ちたけれども畳

の縁近くに墨書きの下絵が残る（前頁図参照）。

4 源氏物語提要 巻4 行幸 江戸時代後期写

袋綴6冊

薄藍色布目紙表紙（縦27.2、横19.1糎）左肩に型押し霞引き・銀泥竹文様の楮紙題簽（縦18.4、横2.7糎）を押し「源氏物語提要 一（～六）」と墨書する。型押し装飾の題簽は稀。見返し、本文共紙。各冊遊紙なく、巻頭に目録を置き第1丁オモテより書き始める。ただし第6冊には目録がない。漢字平仮名交じり、毎半葉8行24字程度。数手による寄り合い書きであろうけれども、相互によく似ていて区別が難しい。朱の合点・圈点あり。巻首に「丹羽／葦奔」の朱文蔵書印。

第6冊最終丁に「われと姓おなじき人のむすめを」以下、著者今川範政（1364～1433）跋文を載せ、その末尾「永享四年／八月十五日 上総介範政 在判」によって一応の成立時期を知りうる。永享4年（1432）は範政の最晩年である。『源氏物語提要』は流布本・異本に大別出来、6冊・10冊の仕立て方を見れば、ほぼどの系統か見当が付く。掲出本は流布本。

物語の和歌全てを採録、あらすじを説明する点で、**16 源氏大鏡**と似るが、原典から離れた説明「紫上の三つの恨み」（須磨）・「故常陸宮の五家髓脳抄と云書を残し」（玉鬘）・「三ケ日の祝」（楨柱）など、現在の目から見れば自由すぎる要約や説明が非常に多く存する。『河海抄』・『花鳥余情』と一致する箇所もあり、成立過程は相当に複雑。伝本は少ない。

光源氏36歳の冬、冷泉帝が大原野へ行幸するところを展示。見開き左面最終行「其極月御かりのために大原野へ御幸なる」とある通り、鷹狩りの行幸である。玉鬘は初めて父内大臣と帝とを見た。

（参考）絵入源氏物語 行幸 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

藍色無地紙表紙（縦27.0、横18.2糎）中央に間合紙題簽（縦16.4、横3.3糎）を押し、「みゆき 玉かつら并七哥を名とせり」と刷る。本文に匡郭なく、毎半葉11行22次程度（印刷面縦約20.5、横15.5糎）。合点・傍注・人名注記等を付刻。絵には匡郭（縦19.0、横14.5糎）があり、行幸巻は全2図、うち1図は見開きとする。

夢浮橋末に「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。出版を企画し絵も自ら手がけた山本春正（1610～1682）は当時著名な蒔絵師であり、古典学者としての力量が高かった。大冊『古今類句』の刊行でも知られる。

掲出本は、物語本文54冊に山路露1冊・系図1冊・引歌1冊・目案3冊を加え、全60冊の構成。優美な絵柄と本文の読みやすさ、付録の便利さにより、広く流布して後代への影響が大きい。**14 源氏物語奈良絵本**も、挿絵の典拠はこの絵入本である。

展示箇所は、冷泉帝の大原野行幸。見開き右端の鳳輦に冷泉帝が乗られる。「諸衛の鷹飼どもはまして世にめなれぬすり衣をみだれきつ」と書かれる鷹匠の風体は、確かに「世にめなれぬ」姿であり珍しくおもしろい。

5 十帖源氏 夢浮橋 万治4年(1661)刊 江戸時代前期刷

袋綴10冊

縹色地に紗綾形・唐草文様を型押しした紙表紙（縦27.5、横19.8糎）中央に楮紙題簽（縦17.1、横3.4糎）を貼り、「十帖源氏 一（～五）」と刷る。残念なことに第6冊の題簽は落

剥。各冊巻頭に目次を置き、本文は無郭11行22字程度（印刷面縦約19.5、横15.5糎）の漢字平仮名交じり、夾注・傍注を付刻する。四周単辺（縦19.2、横15.5糎）の絵が全131面あり、著者自身の手になる。第1冊巻首に源氏物語起筆説話（石山寺伝説）、第6冊末尾に「此一部年来心にしめて」から始まる跋文。刊記なし。無刊記本の他、万治4年（1661）刊本があるけれども、帙外題には「十帖源氏 寛文元年刊」と見え、その根拠不明。

撰者野々口立圃（1595～1669）は、書・俳諧・文章・絵のいずれにも長じ、雛人形細工を家業とした。寛文10年（1670）には120面の絵を持つ『おさな源氏』も出版、『源氏物語』への傾倒ぶりがうかがえる。その成立は、撰者の還暦承応3年（1654）と推定されている。

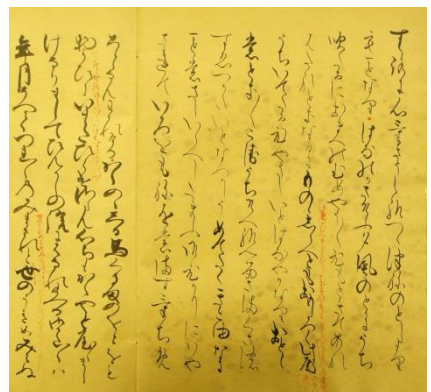
展示箇所は第6冊夢浮橋、浮舟の異父弟小君が姉の隠れ住む小野を訪れた箇所。右面の絵に尼君の庵が描かれ、その簀子縁に薫大将の手紙を持った小君。『源氏物語』では、「かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは今少し入りて、山にかたかけたる家」（手習）と説明される。平安時代の小野は、世を捨てた人がひっそりと生き、静けさを好む貴族の山荘が点在する場所であった。比叡山西坂本、現在の八瀬あたりか。左面は六条院の図。この図は、現在の研究者が復元想定するものとかかなり異なっている。

II 宇治の風景

琵琶湖を源とする宇治川が山間から野へ出るあたりは、木幡山・橋の小島・山吹の瀬・宇治の網代など、多くの歌枕が点在する風光明媚な土地柄です。しかし荒々しい川の音が響き、峯に霧の立ちこめるところでもありました。ここへ失意の八宮と娘達に移り住み、物語の新しい舞台が開けていきます。

6 源氏物語 橋姫 帚木・夕顔・松風・浮舟欠 江戸時代前期写 列帖装50冊

紺地に金銀泥下絵の紙表紙（縦24.6、横18.0糎）、押発装あり。下絵は各帖の内容と関係ないようで、草花・水辺・鳥虫等を描く。表紙中央に金泥霞引き布目紙題簽（縦14.8、横3.1糎）を貼り、「きりつほ」以下の巻名を墨書。本文とは別筆である。見返し、斐紙に金揉み箔散らし。首尾に遊紙各1丁を置き、次丁オモテより每半葉9行20字程度に書写、朱の句読点・合点・イ本注記等あり。ままた引歌を朱・墨2種の細字にて書き入れる。これは本文と別筆か。引歌注記は『紹巴抄』と重なるものが多い。



本文料紙、斐。初音巻は冒頭8丁分を細く小さめの文字で写し、9丁オモテより闊達な別の手で書き継ぐ（上図版参照）。他の巻はほぼ全てが書き継ぎの書風である。虫損・汚れ等のほとんどない美本。

掲出本は江戸時代前期の贅沢な書物ながら、単なる調度品ではなく、学術的に意味のある書き入れもなされている。本文系統は青表紙本の肖柏本・三条西家本に近く、朱で注された細字の他本校合は、

同じく青表紙本系の一本に対応する。

八宮は京の邸宅が焼失した後、宇治川北岸に転居する。その住まいについて書かれたところを展示。山荘は、見開き左面4行目「宇治と云所によしある山里も給／へりけるにわたり給…みゝかしましき川のわたりにてしづかなる思ひに叶ぬ／方もあれどいかなどはせん花もみぢ水の流にも心／をやるたよりに」と紹介されていて、訪ねてくる人もなく、宇治山に隠棲する阿闍梨を師とするばかりであった。

(参考)都名所図会 卷5前朱雀 林芳兵衛刊 江戸時代後期刷 袋綴6冊

薄藍色無地紙表紙(縦25.6、横18.2糎)左肩に黄色地楮紙題簽(縦18.2、横3.7糎)を押し、子持ち枠内に「都名所図会 平安城再 刻」等と刷る。紫の角裂あり。巻1に五条(菅原)為俊(1741～1783)の序・凡例・目錄等を置き、巻6末に撰者秋里籬島(生没年未詳)の跋、後ろ見返しに「書林 京二条通堺町東へ入町林芳兵衛」の刊記と出版広告。刊年は記されていない。小口書「都名所 一(～六尾)」。

天明6年(1786)再刻本と言われるが、題簽・本文共に版木摩滅箇所があり、全面的改刻とは考えにくい。『都名所図会』の出版・印刷・版木の移動については、なお調査すべきことが多く残る。

見開きにゆったりと描かれた平等院の図を展示する。手前が宇治川、八宮のわび住まいは、川の北岸すなわち平等院の向かい側(京都側)に構想されている。

7 花鳥余情 第25宇治巻の内 椎本 江戸時代後期写 袋綴10冊

縹色布目紙表紙(縦24.3、横18.4糎)中央に薄黄色地題簽を押し。外題は四周単辺匡郭(縦17.5、横2.9糎)を刷り、その中に「花鳥余情 一(～十)」と墨書、本文とは別筆であろう。各冊遊紙なく第1丁オモテより書き始め、毎半葉11行27字程度、全30巻を10冊に書写。書き入れなし。

室町時代を代表する注釈『花鳥余情』は、河内本系本文を用い、文脈に即した読み解きや装束故実の詳しさが特徴である。伝本は、初稿本・再稿本・献上本に大別出来、掲出本は第10冊末奥書の年記文明4年(1472)・文明8年・文明12年から、再稿本と判定される。

見開き左面終わりから2行目、物語の原文「宮こにはまだ入りたゝぬ秋のけしきををとほ山ちかく風の／をともしとゝひやゝかにまきの山へもわつかに色つきて」を引用し、「をとほ山は都ちかき所也まきの山はうぢにいたりてのことを言ひ」と説明、薫大将が宇治まで移動する行程に合わせた行文と解しているのである。『紫式部日記』冒頭の「秋のけはひ入りたつままに」がしばしば引き合いに出される箇所を展示した。八宮は「まきの山べ」よりさらに奥の宇治山に籠もり、そのまま亡くなる。

8 絵入源氏物語 総角 小型本 江戸時代前期刊 袋綴30冊

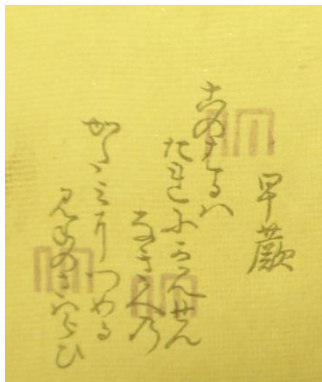
藍色紙表紙(縦15.7、横11.1糎)中央に間合紙風の題簽(縦10.1、横3.8糎)を押し、巻名を刷る。押発装あり。表紙は多くの冊において無地の如く見えるが、唐草・瑞雲等を艶刷りしたもの。表紙・題簽とも原装、したがって各冊2～3帖の分け方も出版時のまゝを伝える。見返し、本文共紙。遊紙なく第1丁オモテより刷り始める。四周単辺匡郭(縦11.5、横8.6糎)内に漢

字平仮名交じり本文每半葉11行21字前後、傍注・合点・句読点・濁点等を付刻する。刷りはかなり良好である。**承応3年刊絵入源氏物語・万治3年刊絵入源氏物語**に続く絵入本。江戸時代後期まで増刷、広く読まれたが、出版時の原態を留めるものは比較的少ない。古い塗り箱入り。与謝野晶子（1878～1943）が親しんだのも、この小型本である。典拠となった**承応3年刊絵入源氏物語**の風雅な趣に比べ、掲出本の絵はやや古拙（下図版は承応刊本）、独自のおもしろさを備えている。

展示箇所は、紅葉狩りのついでに中君を訪ねようとする匂宮一行と、貴人を迎えるべく準備を整えた故八宮山荘。空しく立ちつくす大君・中君が印象的である。「紅葉を葺きたる船のかざりの錦かと思ゆるに、声々吹き出づるもの音」は、当時の川遊びを具体的に描いた珍しい措辞。



***9 源氏五十四帖 尾形月耕画 早蕨 明治25(1892)年横山良八刊 1枚**



落ち着いた色調と繊細的確な描線が映える大判錦絵（縦32.3、横21.9糎）。故八宮の山荘で姉大君を追慕する中君、簀には硯箱や山の阿闍梨から贈られた蕨・土筆が描かれる。阿闍梨への返事を書く料紙が、中君の膝の上に見える。右上の色紙形「早蕨／このはるは／たれにかみせん／なき人の／かたみにつめる／みねのさわらび」は、阿闍梨の詠「君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬ初蕨なり」に対する中君の返歌。色紙形の部分に布目文様の空押しが施され（左図参照）、凝った作りとなっている。

尾形月耕（1858～1920）は日本橋生まれの江戸っ子絵師。豊かな天分に恵まれ、日本画の他、陶磁器の下絵や蒔絵意匠までこなし、しかも独学であったのは驚きである。掲出の錦絵は、物語54帖分に目録1枚を加えた55枚、全揃いはなかなか市場に現れない。九曜文庫（中野幸一博士）にご所蔵か。

10 源氏物語 古活字版 東屋 寛永(1624～1644)頃刊 袋綴54冊

藍色地に麻の葉文様を艶刷りした紙表紙（縦27.4、横19.3糎）は古いものではあるが、改装か。中央に題簽を押すが、現在落剥の冊にはその跡に「きりつほ 一」の如く打ち付け書き。東屋は題簽が残り、「あつまや 五十」と墨書する。遊紙なく、第1丁オモテより每半葉11行21字程度（印刷面縦約22、横15.5糎）に活字を組み、ノドの部分に巻名の略称と丁数を付印する。寛永古活字第2種異植字版、現存する揃い本はごく稀。各冊巻首に「勿忘龍求」の朱文印あり。

元和9年（1623）富杜哥鑑刊行の古活字版に依拠し、本文系統は青表紙本の三条西家本に近い。朱墨の書き入れは巻序の早い帖に多く、大部分『湖月抄』の転記と見られる。川瀬一馬『古写古版物語文学書解説』によれば、大東急記念文庫蔵旧久原文庫本の表紙ウラ反古に寛永11年（1634）の年紀を持つものがあり、掲出本刊行の下限を知りうる。表紙ウラの反古は意外な発見に満ちており、渡辺守邦『古活字版伝説』・『表紙裏の書誌学』がその代表的研究。

展示は東屋末尾、薫が浮舟と同車して宇治に赴く道行き。右面9行目半ばより「山ふかく入るまゝにもきり／立たる心ちし給ふうちながめてよりみ給へる袖の／かさなりながらながやかに出たりけるが川霧に／（以下左面）ぬれて御ぞのくれなゐなるに、御なをしの花の／おどろおどろしくうつりたる」は印象的な描写である。

11 源氏物語絵 浮舟と匂宮と鷺 室町時代後期写

軸装1幅

丁寧に賦彩した色紙形（縦26.1、横21.5糎）を古裂表装。細やかに衣紋・面貌・建物を描き、室町大和絵の典型と言えよう。華麗な装束の女性は浮舟、御簾の外に雪景色が広がり、中州に鷺、その向こうは宇治橋である。久しぶりに宇治を訪れた薫は、男性二人の間で揺れ動く浮舟の心を知るよしもない。

浮舟巻の当該場面を絵画化した作例は管見に及ばないが、『源氏物語絵詞』（室町時代後期写、大阪府立大学）にはこの箇所本文抜き書きがある。また土佐光起筆『源氏物語画帖』（京都国立博物館）の総角と構図・描写共に酷似する点は、大いに注目してよい。仮名作家として、また古筆研究者として著名な田中塊堂（1896～1976）旧蔵。その箱書はさすがに流麗であり、鑑賞に値する。



この絵では、中州の鷺が見所の一つ（左図参照）。『源氏物語』本文では「さむき中州に立てるかかさぎの姿も」となっており、鶺鴒が登場するはずである。ところが掲出の絵では明らかに鷺が描かれる。これは画家の誤りではなく、「かささぎ」を鷺と理解する古注釈に従ったのであろう。『兼載雑談』にも「源氏宇治のまきにかさゝぎとあるは今のしら鷺なり」の文言が見える

ので、「かささぎ=鷺」説は室町時代には相当広く受け入れられたらしい。

III 近国の旅

平安時代貴族は、公務私用を問わず都周辺の国をしばしば訪れています。神社仏閣への参詣・歌枕探訪・襖ぎ・現地視察から物見遊山まで、その目的はいろいろです。ここでは、畿内の名所や隣国への旅を取り上げました。

*12 源氏物語断簡 伝冷泉為相筆 関屋 河内本 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉

斐楮混漉き料紙（縦23.9、横15.3糎）に8行18字程度書写。古筆切となる前の形は列帖装四半本、手沢から見て丁のオモテ面か。極札2枚が附属し、「冷泉為相卿あふさかの〔琴山〕」（オモテ）・「切庚子 九〔了音〕」（ウラ）は享保5年（1720）古筆了音鑑定、「為相卿あふさかの〔汲水〕」（オモテ、ウラ面記入なし）は大倉汲水の鑑定。朱の句読点あり。『源氏物語』諸本中、朱の句読点を持つものは多く河内本に分類され、掲出の断簡もまた河内本である。断簡右端の和歌「あふさかのせきやいかなるせきなれば／しげきなげきのなかをわけゝん」の第5句を青表紙本系諸本は「わくらん」に作るの、その差異が見て取れる。なお「関屋」の巻名は、空蟬のこの歌に由来する。帰京後石山寺へ参詣する光源氏と、常陸から戻る空蟬一行とは逢坂の関で出会う。古筆切は、迎え

に参上した右衛門佐（小君）を介して空蟬に源氏の消息が渡され、それに対する返歌をしたための場面。この切は温和端正な写しぶりが好ましく、鎌倉時代後期に遡る河内本資料であるところは何より高く評価されよう。

13 源氏物語 伝冷泉為相筆 須磨 鎌倉時代末期写

列帖装1冊

墨流し地に金銀泥霞引き・切箔・野毛等の装飾ある斐紙表紙（縦17.5、横17.1糎）は相当の古表紙だが、改装と見られる。外題なし。見返し、銀切箔を密に蒔いた豪華なもの。本文料紙、厚手白斐紙。現在冒頭1括りを失ったところに別筆の帯木の1括りが添えられ、あたかも完好の冊子の如き外観となる。帯木の括りに「冷泉殿為相卿 ひかる源氏〔守村〕」の極め札があり、この伝称を須磨にも及ぼし典籍全体を伝冷泉為相筆として整理保管する。書写年代は須磨が鎌倉時代末期から南北朝、帯木はそれより早い鎌倉時代後期であろう。帯木の筆者を冷泉為相と極めるのは、古筆家の鑑定として穏当なところであり、書風の特徴と時代とをうまく言い当てている。緞子張りのやや古い帙と新調の桐箱が附属する。装丁を同じくする紅葉賀（甲南女子大学）は、僚巻。

上記のように、須磨4括りと帯木1括りとは書写年代を異にするが、帯木に偶然残された表紙の小断片により、江戸時代初期以前には一揃いの『源氏物語』として取り合わせられていたと推測できる。每半葉10行18字程度。和歌2字下げ2行または3行書きとし、その末尾は直接地の文へ続く。青表紙本系に属する伝本だが、稀に河内本の要素や独自異文を持ち、鎌倉時代の本文を具体的に考える上で、貴重な資料と言えよう。当館所蔵の冊子形態を保つ『源氏物語』中、最古の写本である。『古代文学論叢』第20輯に翻字と解題を掲載。

展示は、光源氏のわび住まいを説明する古来有名なところである。見開き右面2行目半ば以降「おはすべき所はゆき／ひらの中納言もしほたれつゝわびける家／みちかきわたりなりけりうみづらは／やゝいりてあはれにすごげなる山中なり」と紹介される。流謫の住居ながら趣味性豊かな造作であった。

14 源氏物語 奈良絵本 明石 江戸時代前期写

列帖装1冊

紺色地に金銀切箔装飾・金銀泥下絵の斐紙表紙（縦24.9、横17.7糎）左肩に朱地金泥下絵題簽（縦14.8、横3.5糎）を貼り、「あかし 十三」と墨書、本文と同筆である。表紙下絵は冊ごとに図柄を変えた細密優美なもの。掲出本では巻の内容にふさわしく水辺の風景を描く。押笈装あり。見返し、金布目紙。本文料紙、精良の厚手斐紙。この書き手は他にも奈良絵本の本文を写しており、職業的な能書であったらしい。

遊紙1丁を置き、次丁オモテより書き始め、每半葉10行17字程度、漢字平仮名交じり。和歌3字下げ2行書きとし、その末尾は直接地の文へ続く。書き入れなし。当館にはツレの賢木巻を所蔵。本文図柄とも**4(参考)**絵入源氏物語に依拠し青表紙本系統。奈良絵本が先行しそれに基づいて板刻出版する場合と、逆に版本から奈良絵本を制作する場合と、どちら



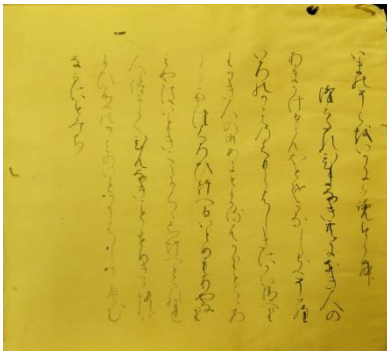
らも作例がある。掲出本は後者に相当し、このような版本を典拠とする例は、他に『伊勢物語』『長

恨歌』等が知られている。天地に薄藍の霞引き・金切箔散らしを施した濃彩の絵5面。絵の前で本文を散らし書きし、余白が生じないよう配慮した箇所もあり、この手法は奈良絵本にしばしば用いられる。

展示は、岡辺の家に住む明石御方を光源氏が訪う有名な箇所。左面は馬に乗る源氏と惟光ら従者、右面4行目半ば「十三日の月はなやかに／さし出でたるにたゞあたによのと聞えたり」と明石入道の消息が書かれる。**4(参考)絵入源氏物語**の挿絵(右図参照)と比較すれば、依拠関係は一目瞭然であろう。

15 源氏物語 未装幀零本 澤標 伝交野時久筆 江戸時代前期写 仮綴1冊

列帖装用の斐紙3括り(縦16.8、横19.0糎)。格別の表紙を持たず、化粧裁ちもされておらず、料紙の左右は漉き耳が残る。書物に仕立てる以前の状態であり、各括りはその下端を細い白絹糸で仮に止めるのみ、通常4箇所ある綴じ穴も開けられてはいない。第1の括り16丁(首2丁は白紙)、第2の括り18丁、第3の括り18丁(後半11丁白紙)、墨付全39丁。各括り第1丁オモテ左上に「身尽一(～三)」の細字書き入れ。これは典籍として完成した場合、裁ち落とされる部分の情報である。毎半葉10行14字前後。未完成品ゆえに、書物製作過程がよく分かる資料。『アゴラ』142号にやや詳しい説明あり。



第3の括り最終丁オモテに楮紙片(縦10.2、横2.2糎)を貼り、「交野時久朝臣正筆」と墨書する。この正筆書きの当否不明ながら、書写年代はまさしく交野時久(1647～1670)の時代に相当し、若くして亡くなった公家の手である可能性は十分認められよう。なかなかの能書。本文は、青表紙本おの三条西家本に近く、若干の独自異文を持つ。第3の括り10行目「なるみち」で突然書きさしとなる理由は不明(左図版参照)。以下約2700字ほどを欠く。

須磨の流謫より京に返り咲いた光源氏が住吉へ出かける場面を展示した。偶然明石の御方も参詣し、源氏の盛大な行列と我が身とを引き比べることになる。見開き右面5行目「…松原のふかみどりなる中／に花もみちをこきちらしたると／みゆるうへのきぬのこきうすきかず／しらず六位の中にも蔵人はあを／色しるくみえて」は、いかにも鮮やかな表現である。

16 源氏大鏡 第3冊の内 玉鬘 江戸時代前期写 列帖装4冊

金茶地に牡丹唐草を織り出した緞子表紙(縦17.3、横23.5糎)は古表紙だが改装後補。中央に金切箔・金泥下絵題簽(縦12.0、横3.4糎)を貼り、「源氏物語抄 春(～冬)」と冷泉流の手にて墨書。本文とは別筆である。各冊首尾に見られる切断の痕跡や巻途中での不自然な分冊などから、元来2冊本であったものを4冊に仕立て直したと推される。現在は、第1冊桐壺～賢木前半、第2冊賢木後半～乙女、第3冊玉鬘～柏木前半、第4冊柏木後半～夢浮橋の構成。第1冊・第3冊巻頭に目録を置く。掲出本外題の「源氏物語抄」や「源氏拔書」「源氏目録」等の題号は、梗概書にしばしば見られるものである。

本文料紙、斐楮混ぜ漉き。毎半葉14行15字程度、ままた同筆の読み・傍注を付す。和歌2字下げ

2行書き、改行して地の文を続ける。その詠者は細字頭注として示され、和歌を地の文へ続けず、細字頭注で詠者を表記するのは、梗概書によく見られる形式である。帙外題に「幸」の朱文印を押す。戦後第一級の古典籍収集家であり、また古典文庫を主催して国文学研究に大きく貢献された吉田幸一博士（1909～2003）の旧蔵。

所謂「物語のおこり」を巻頭に据え、巻の順に和歌の全てを抄出、時折難解な語句や人物の系譜関係を説明しながら筋を辿る書物で、原型は南北朝時代の成立か。この種の梗概書を『源氏大鏡』と呼び、第1類～第3類に大別され、掲出本は第2類の代表的善本。古典文庫404に翻字と解説がある。しかし解説で現在の4分冊を本来の形態とするのは、誤り。**19 源氏小鏡**とは和歌の全部を持つか否かによって、容易に区別出来る。

筑紫より上京した玉鬘が、乳母と共に初瀬へ詣でる章段を展示。観音のお導きか、光源氏に使える右近と再会、左面5行目「…むかしいまの物／がたりなきみわらひみするに秋かぜ／谷より吹のぼりて心ぼそし」と御堂の風情が語られる。

IV 鄙の往還

京を遠く離れ、なじみの薄い風景と向き合う日々。旅の興趣も寂寥感もひとしおと言うところです。さすがに公卿が遠国まで出かけることは稀、しかし女流作家の父や夫や兄弟達の多くは、受領として任国を往復しました。紫式部も、彼らから聞いたさまざまな噂話を物語に織り込んだことでしょう。

17 源氏物語 夕顔 零本2冊の内 江戸時代初期写

袋綴2冊

砥粉色無地紙表紙（縦27.3、横21.9糎）を始め、書物全体に破損・虫損あり。特に上部の痛みが目立つ。当館にて補修済み。首尾に遊紙1丁、第2丁オモテより書き始め、毎半葉10行22字程度。漢字平仮名交じりに書写し、朱の句読点・傍注（漢字片仮名交じり）・合点／濁点等を施す。傍注はかなり詳しく、『河海抄』『細流抄』等本格的な注釈書の引用もあるが、特定の文献に収束するかどうか未勘。講釈の聞き書きとも思われる。本文は青表紙本の肖柏本・三条西家本に近い。「寛文頃写」と認定された故池田利夫博士のペン書きメモが添うけれども、さらに古く江戸時代初期、慶長（1596～1615）あたりまでさかのぼるのではないか。

伊予介が任地（現在の愛媛県）より上京、光源氏に謁する場面を展示。伊予介は後妻空蟬や娘軒端萩と源氏との関係を、勿論知らない。右面1行目から「伊予の介のぼりぬ先いそぎ参れりふなみちのし／わざとてすこしくろみやつれたる旅すがたい／とふつゝかに心づきなし…（5行目最下段）国／の物がたりなど申すにゆげたはいくつと問まほ／しくおぼせど」と書かれ、「ふなみちのしわざ」で黒くなったのは、海路14日（『延喜式』の規定）を標準的な旅の日数と考えれば、納得のいくところ。

18 源氏物語 龍文刷題簽 須磨 江戸時代前期写

列帖装54冊

薄藍の市松・鱗形・七宝繋ぎ等を刷り、金銀泥の下絵装飾を施した斐紙表紙（縦15.4、横15.5糎）中央に金泥龍文刷り題簽（縦10.1、横2.5糎）を押し、巻名を冷泉流の手で墨書、本文とは別筆。表紙の装飾は洗練された瀟洒なものであり、気品高い仕上がりとなっている。見返しには銀切箔を密に蒔き、帖によっては金銀の霞引きを施す。概して表紙より題簽の痛みが進行し、桐壺・花散里・薄雲などはその表面が剥離、より古い題簽の襲用も考えられる。押発装あり。本文には手擦れも殆どなく、保存良好の美本である。

本文料紙斐紙。毎半葉10行15字程度、和歌2字下げ2行書きとし、末尾は直接地の文に続く。書き入れなし。青表紙本系の三条西家本に近い本文を、数筆にて寄り合い書き。若菜下末尾に添付された紙片によれば、後陽成天皇皇子尊寛（1608～1661）の筆跡となる。その当否を確かめられないけれども、掲出本は一条院尊寛の生きた時代に写されていると見てよい。

右近将監の父、すなわち元の伊予介は常陸の国司となって赴任、小君や空蟬も一緒に下向する。しかし将監は、蔵人巡爵から外れ殿上の簡も削られて流謫の光源氏に同行し、須磨で不遇の日々を送ることになる。常陸は大国（国の分類で最も上）、その国司は当然栄職であり、右近将監以外の一家は意気揚々と東海道を旅したのであろう。展示箇所見開き左面6行目に「おやのひたちになりてくだり／しにもさそはれでまゐれる也けり」の行文が見える。その後、常陸から帰京する浮舟が逢坂の関で光源氏と邂逅することについては、**12 源氏物語断簡**を御覧いただきたい。

19 源氏小鏡 玉鬘 明暦3年(1657)安田十兵衛刊

袋綴3冊

藍色紙表紙（縦27.2、横19.5糎）左肩に楮素紙題簽（縦18.2、横2.9糎）を貼り、子持ち枠内に「絵入／源氏小鏡／上（下）」と刻す。第2冊の題簽は落剥。原表紙・原題簽ではあるけれども全体に疲れが見え、雷文地に牡丹唐草の型押し文様も、ほとんど目視しえない。見返し、本文共紙。各冊巻首に目録1丁を置き、次丁オモテより刷り始める。版心文字なし。各巻1図の挿絵。

本文匡郭なく、毎半葉13行22字程度（印刷面縦約21、横18糎）。漢字平仮名交じりの本文に振り仮名を付刻する。朱の句読点若干を書き入れ。挿絵は四周単辺（縦21.5糎、横不定）内に収め、3行前後の本文を加えて半葉1面分とする。1面全体に1図を描かない理由は不明。冊子形態ではない典籍に依拠したか。

下冊末尾に「明暦三年丁酉仲秋吉辰／洛陽誓願時前／安田十兵衛開板」の刊記を備え、『源氏小鏡』中、挿絵を持つ最も早い版。文字・絵とも雅味豊かで評価が高い。『源氏小鏡』は『源氏物語』より代表的な和歌を抜き出し、あらすじと連歌付合いを含む梗概書であり、中世によく利用された。和歌の全てをもつ**16 源氏大鏡**とは異なる。伝本の種類も多く、6分類説によれば第2系統改訂本系に属する。

粗暴な大夫の監から逃れ、九州から都へ向かう玉鬘一行の船の図を展示した。見開き左面3行目「をひての舟をやたてんずらんとおちてはや／ふねにて／のぼせた／てまつる／なり」の説明と、瀬戸内海を進む船が見える。逃避行の乗り物とは思えないほど立派な仕立てである。船屋形内の女性は玉鬘か。

20 絵入源氏物語 横本 手習 万治3年(1660)林和泉掾刊

袋綴29冊

紺色無地紙表紙(縦14.7、横21.3糎)の美濃版半裁横本。押笈装の痕跡あり。表紙中央に楮素紙題簽(縦11.1、横3.3糎)を貼り、「きりつほ／はゝ幾々」の如く巻名を刷る。複数帖合冊を原則とするが、分量の多い巻は1帖1冊仕立て。本文25冊・『目案』3冊・『系図』と『山路の露』1冊の合計29冊。夢浮橋末尾「写本云」以下の原奥書は**4(参考)絵入源氏物語**を継承したものであり、「龍集万治三年庚子／除稔一日／林和泉掾板行」の刊記が続く。この刊記の内、年紀と書肆とは書風が異なるのは入木修訂の結果であろう。したがって掲出本は初印と認めがたい。「渡辺忠左衛門」版が先行する(吉田幸一『絵入源氏物語考』)。

毎半葉16行14字程度(印刷面縦約12、横18糎)句読点・合点・濁点・傍注等を付刻する。絵は四周単辺(縦11.8、横17.6糎)内に収め、**4(参考)絵入源氏物語**の挿絵に基づき作画、風景を描くところでは横長の画面によく調和する。板刻は素朴、原拠資料とは別趣の魅力を備えている。

展示箇所は、妹尼の聳中將が小野の里を訪れた場面。見開き左面に中將と少將の尼、鷹を手に据えた人物が描かれ、右面12行目「八月十日あ／まりのほどに小鷹がりのついでに／おはしたり」と対応する。その後、中將の笛に誘われて大尼君は「たけふちゝりちゝりたりたんな」と一人興に入って東琴をかき鳴らす。「たけふ」は武生であり、催馬楽「道の口」の「武生の国府に我はありと親に申したべ、心あひの風や」とも関わる(山田孝雄『源氏物語之音楽』)。

紫式部は結婚前越前の国府に住んだことがあり、父越前守藤原為時に伴われての長い旅と雪深い在地暮らしを経験している。越前国府は武生に置かれていたので、武生の地名が出てくる催馬楽を引用したり(浮舟巻)、当該手習巻「たけふちゝりちゝり」の条を書いている時には、格別の思いがあったろう。掲出本では「たけふち. ちりちり. たりたな」の本文。「たけふ」を武生と解しえなかったらしく、「たけふち」と区切るところがおもしろい。

